

旧制大阪高等学校、浪速高等学校の”記憶”



第1回記念祭が開かれている浪速高校

「嗚呼黎明は近づけり」「友よ我らぞ光よと」…これらの歌詞に胸を熱くされる人もおられるだろう。それぞれ旧制大阪高校と旧制浪速高校の寮歌・愛唱歌の歌詞である。

かつて各地に“高等学校”があった。現在の高等学校ではない。明治27(1894)年と大正7(1918)年の高等学校令で設置され、戦後に廃止された旧制の学校である。今の高校が中等教育機関であるのに対し、国のリーダーを養成する“帝国大学”に進学する前段階の高等普通教育を担った。

少人数による教育が行われ、帝国大学と同程度に定員が抑えられたので、受験競争に煩わされずに大学に進学できた。学生も自由に学び、教養を深め、学生活動も盛んで独自の文化を生み出した。戦前のエリート教育や男子に限られたなど批判もあるが、夏目漱石や小泉八雲は第五高等学校(熊本大学の前身)で教鞭を執っているし、大阪ゆかりの作家では、川端康成が旧制第一高等学校、三好達治、織田作之助、梶井基次郎が旧制第三高等学校に在学した。

では大阪の旧制高校はどんな学校だったか？ 現在、大阪大学総合学術博物館(阪急石橋駅下車)で、旧制大阪高校と浪速高校に関する特別展「嗚呼黎明は近づけり…友よ我らぞ光よとーよみがえる旧制高校 大高・浪高の記憶と記録ー」を開催している(7月9日まで)。日曜休館、お問い合わせTel:06-6850-6284、<http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>。

大阪高等学校は、大正11(1922)年に阿倍野区(当時は東成郡天王寺村)に開校した。国立である。鉄筋コンクリート3階建ての校舎は最新式であった。あべの筋に面して記念碑があり、同窓会が設置した「青春の像」(表紙写真)は、平成21年に阪大豊中キャンパスに移設されている。卒業生に、ノーベル化学賞の福井謙一、小説家の藤澤桓夫、中国文学者の竹内好、評論家の保田与重郎、漫才作家の秋田實と長沖^{まこと}、天理教二代真柱の中山正善らがいる。藤澤が在学中、大高の仲間たちと刊行した文芸雑誌「辻馬車」は有名だ。

興味深いのが小説家の開高健で、昭和23(1948)年、大阪高等学校に入学するが、翌年の学制改革

で旧制高校が廃止され、大阪市立大学法文学部に再入学している。ちなみに小松左京も同じ年に第三高等学校に入学し、「人生で一番楽しかった年」という旧制高校時代は一年しかなかった。

浪速高等学校は、大正15(1926)年に府立校として、現在の豊中市待兼山町に開設された。初代校長三浦菊太郎は「西の学習院を目指す」という言葉を残し、大阪大学豊中キャンパスにある大阪大学会館(旧イ号館、登録文化財)は、浪高本館として建設されてモダンな偉容を誇っている。サントリーの佐治敬三や大阪大学総長となる免疫学の山村雄一、民俗学者の谷川健一などを輩出した。

ところで二校開設には特別な事情があった。大阪には、明治元(1868)年に開設された官立洋学校の舎密^{せいみつ}局(大手前に記念碑)の流れを汲む第三高等学校(後の三高)があったが、明治22(1889)年に京都に移転し、帝国大学も京都に設立される。日本有数の大都会でありながら大阪は、高等普通教育の空白地となり、ようやく大正後期に大高、浪高が誕生したのである。

その後、昭和6(1931)年に大阪帝国大学(現・大阪大学)が開校し、昭和25(1950)年、学制改革で、一般教養教育のために大高、浪高を新制の大阪大学が包括したわけだが、阪大博物館の展覧会も、そうした大阪の高等教育の歴史を再確認するための企画である。

なお、大阪は商売、金儲けに追われ、文化や学術研究、教育などをおろそかにしがちで、いわゆる三高の京都移転を見過ごしたのも、大阪の見識のなさとする説がある。現代でも旧帝国大学(東京、京都、東北、九州、北海道、大阪、名古屋。開校順)のうち、都道府県庁所在の都市に大学本部がないのは大阪だけである。その理由は何故か？ 大阪と大学のかかわり方の問題の根の深さに愕然とする。



特別展(大阪大学総合学術博物館)では、当時の制服やマントも展示されている。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像ー」(創元社)など。